

# 北の譜

聞き手 奥津義広記者(北海道新聞社)

## <東京音楽学校>

### 作曲科講師となる

札幌から家族ぐるみで上京、日光にとりあえず居を構えてまもなく、東京音楽学校(現東京芸術大学)校長の小宮豊隆さんから突然、「いちど学校へ出て来ないか」という手紙をいただいた。

小宮さんは夏目漱石のお弟子さんですが、ある時、懇意にしていた森田たまさんに、同じ北海道というところで「昔、滞欧中、伊福部という男の作品を聞いたことがあるが、どうしているだろう」と聞いたらしい。

森田さんは私のことをよく知っているもんですから「日光にいるが食えないで困っているようだ」と返事した。それで小宮さんの手紙となったわけです。

行ってみると、「これからの日本は、君みたいな人にやってもらわないとだめだ」と作曲科講師のお誘いだった。すぐに引き受けて、九月から講義を始めたんです。

次の年の四月まで、日光から学校へ通ったんですが、月給が四百円。電車賃が片道百円なので、学校だけだったら二回往復で損しちゃうわけですね。朝六時ぐらいに起きて、やっと午後一時からの講義に間に合う。晩の六時、七時までやりましたがね。戦争でみんな学ぶことに飢えていたんですね。帰りも大変でした。電車の出る浅草・松屋デパートの焼け跡のあたりを乗客が二、三周ぐらい列をつくって回っているんですよ。電車に乗れば、ガラスが割れてるから雪が寒風と一緒に吹き込んでくる。寒くて寒くて。ようやく家に着くころは、もう夜中の十二時を過ぎてました。

### 「管絃楽法」を出版

今思い出しても残念で仕方がないことがあります。「管絃(げん)楽法」という本をまとめるつもりでメモや原稿をトランクに入れ、持ち歩いてた。ところが、日光に入る手前のカーブで電車が揺れた時、割れた窓からそのトランクを落としてしまったんです。次の日さっそく拾いに行ったんですが、何しろ物のない時分だからもうトランクの影も見えず、紙切れだけが散っている。それも風が吹いているのでもうばらばら、ほとんど残っていない。

結局、このために、「管絃楽法」をまとめるのに五年は損したんじゃないでしょうかねえ。全部初めからやり直しでしたから、やめようかと何度も思ったんですが、そのつどもう一度だけ頑張ってみよう。

「管絃楽法」の上巻が出たのは二十八年です。下巻は日本語のほか英、仏、独、イタリアの四ヶ国語でテクニクを書いたのですが、一行書くのにも資料探しや問い合わせにひどく手間どり、出版にこぎつけたのは上巻が出てから十五年もたった四十三年でした。苦勞のかいあって、今では幸い芸大の教科書としても使われていますが...



王可之(左)と共に = 自宅にて

王は、東京に出てきた伊福部を有形無形でサポートした作曲家で、「管絃楽法」は彼に捧げられている。

### 学生数増え芸大去る

二十二年の四月に日光から東京・世田谷に移り、生活もようやく落ちついてきた。しかし大学(芸大)になってからも続けていた講師の方は、二十八年とうとうやめました。

映画の仕事が増えたこともあります。学生増で四十人ぐらいも担当しなけりゃならなくなったのが一番の理由です。「十人ぐらいにしてほしい」と大学に頼んでもきいてもらえず、「それならとても責任持てない」ということになった。管絃楽法なんか、一人に三、四時間はかかりますから、四十人なんてとても面倒みきれない。

音楽学校当時は十人いたかないか。終戦直後で教室には電球がなく、暗くなると女子寮から電球を借りてきて作品研究をするというような熱気がありました。こっちも若かったから一生懸命教えるし、生徒も納得出来ないことがあると食い下がってくる。なかなかのもんでした。いま第一線で活躍している作曲家の芥川也寸志君や黛敏郎君、奥村一君、矢代秋雄君ら、そのころの教え子です。みんなさえた優秀な生徒でした。

学生が多くてはとてもこんな授業は望めません。作曲家の雰囲気ではなくなってきたんですね。ただ講義ということで、本に書いてあることだけをしゃべるのじゃつまらないし、何の役にも立ちません。

昭和 60 年 4 月 5 日(金)夕刊

金曜ぷらざ